シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　盛岡中央高校附属中学校副校長

第33回

「テンメイ」で人生を語る

私は岩手県立花巻北高校で校長を務めていた2年間、花巻ロータリークラブの会員になっていました。花巻北高校の生徒が奨学金や海外留学などで大変お世話をいただいていたので、そのことへのお礼の意味もあって入会させていただいたのでした。

そのロータリーの例会ではしばしば「卓話」とよばれるミニ講演が回ってきます。私がその卓話を担当したある時、「最近の花高のホットニュースから」というタイトルで写真のような、サイコロトークを考えたことがありました。

参加者にサイコロを振ってもらい、出た目のテーマについて話すというものです。私はこれを作った時、ホットニュースを五つしか思いつかなかったので、とりあえずダミーとして6の目には、その時何となく頭に浮かんだ「テンメイから学んだこと」という話を入れてしまいました。卓話は無事に終わったのですが、メンバーから「テンメイ」の話をぜひ聞かせてほしいとの要望があり、その話もさせていただきました。それはこんな話です。

□天皇賞馬「テンメイ」から学んだこと

私の実家は、旧盛岡競馬場の近くでした。もう三十数年以上前の話ですが、私がその競馬場に行ったとき、とても驚いたことがありました。何と「テンメイ」が私の目の前を走っていたのです。テンメイとは1978年に天皇賞を制覇した名馬であります。私はその場で思わず叫んでしまいました。「栄誉ある天皇賞馬として中央競馬を引退したテンメイを、地方で走らせてよいのか！」。そういいながらも私は、テンメイの走る姿を目に焼き付けていました。彼は淡々と走り、馬群に紛れ、着外でゴール

しました。

私はその様子を見て、少し考え方を変えました。「たとえ着外になろうとも、テンメイはプライドを捨て、走る姿を若い馬たちに見せることで彼らを育てているのではないか。地元から羽ばたけ、中央で輝けというメッセージをおくっていたのではないか」。まあ、そんな話をしたのでした。もちろん、この話は私の思いを勝手に述べただけなので、事実と整合しているかどうかは別問題であります。

テンメイに我が人生を重ねる

さて、私がこの話をしたのは、ちょうど還暦を迎えていたときでした。つまりその年が定年退職の年だったのです。この時期になると、いろんな方が、退職後どうするのか私に尋ねてきます。「再任用しないんでしょ」「先生はどっかの大学に行くのがもう決まっているんですよね」。私より私の進路に関心を持っている人がたくさんいたようでした（笑）。でも私は当時全くノープランでした。年金が出るまで晴耕雨読の、足るを知る生活で糊口を凌ぐのが目下の理想の姿だと周囲には公言しておりました。

そんな私でも、やりたいことはありました。それは、若い人たちの学びの輪に交わることでした。そして自分も数学のことや教育のことだったら多少は何かしらの貢献ができるかもしれないと思っていました。そういう状況の中だったからこそ、卓話を担当した際に、テンメイの姿を思い出したのかもしれません。

「そうか。なぜテンメイは走ったか。それは、走ることが習性であり、走ることが大好きだったからだ。競走馬としての使命は他の馬に勝つこと。でも、本当は他の馬たちと併走し、人馬一体となって一瞬の風になることこそが本望だったのではないか」

私はおこがましくも、天皇賞馬のテンメイの人生（馬生？）を自分にだぶらせてしまったわけです。こうなったら、おこがましついでに、最後に、テンメイにかこつけて、退職前に自分が思っていたことを記しておきたいと思います。

それは、私は昔取った杵柄を振りかざしながら上からものを言うより、原点に戻って、ひたすら学び続ける人でいたいということでした。どこかの部署に天下ったり、ナントカ長とかの肩書をもらって仕事に就くのは、金には困らないかもしれないけれど、きっと自分を失ってしまうだろう。ましてや、大学で落ちこぼれていた私が、どっかの大学で「教授」などと偉そうに名乗るほど自分は厚顔無恥ではない。

私は、自分と価値観を共有できる人々や、魂がシンクロする仲間たちと、楽しく朗らかに、かつ真面目に様々なことを語り合いたい。そしてその中で、社会や学校教育に見え隠れしている課題や理不尽に対し、ささやかに声をあげ行動できる存在になれれば幸せだと思う。その思いは、今でも変わらないし、むしろその思いは年々強いものになっているような気もします。

すまんテンメイ。今回は天皇賞馬の君の名を、身の程知らずにも私の人生を語る引き合いに出してしまった。